

長野県立歴史館たより

2015年 春号 vol.82

特集 春季企画展

山と海の廻廊をゆく



開館20周年を迎え、 新たな第一歩へ



平成6年(1994)11月3日、文化の日に開館した長野県立歴史館は、開館20周年を迎えました。都道府県立としては全国で初めて文書館・埋蔵文化財センター・歴史博物館的機能を兼ね備えた施設として、県民の財産である文化財の保存を軸に、それらを積極的に活用・公開してまいりました。

果たして、県民のみなさんに満足いただける活動であったか、これまで歩んだ道をふりかえり、新たな一步を踏み出したいと思います。

昨年春には開館以来収集^{きら}してきました優品を一堂に会した館藏品展「歴史に煌めく日本の美」、夏には「信州山の日」制定を記念した夏季展「山とともに生きる」、秋には信濃の戦国時代から江戸時代初めの武士の生き残りの決断をテーマにした秋季企画展「信濃武士の決断」を開催しました。そして、縄文時代中期にどのように過剰な装飾を有する土器が出現するかを扱った冬季展「縄文土器展」を2月1日まで開催しています。さらに2月28日からは、北陸新幹線金沢延伸や善光寺御開帳を記念した春季企画展「山と海の廻廊をゆく」を予定しています。扱う時代も分野も、バラエティーに富んだものにすべく取り組んだこれらの展示は、20周年を迎える区切りの展示となったのではないかと思います。

しかし、一方でふりかえってみますと、20周年を迎える今日でも、中中信のみなさんからは当館の活動が今ひとつ身近なものとして感じられないとのご意見もいただいております。各種の出前講座などで県内各地におじゃますることも多いわけですが、やはり当館が北信に立地しているという条件を克服する活動がよりいっそう求められています。

そこで、一部は昨年より始めておりますが、今年からは巡回展、巡回講座などを積極的に組み込んだ活動にしていまいりたいと考えております。

さて、来年度の展示を紹介しましょう。春季企

画展が終了した5月下旬からは、「長野県の遺跡発掘2015」が始まります。この展示は、7月下旬には伊那文化会館に、さらに9月下旬からは安曇野市豊科郷土博物館で巡回実施されます。当館で行われた展示を県内各地でご覧いただく試みの第一歩です。



文化庁助成事業による地域連携講座(11/22)

伊那文化会館で巡回展がはじまる同じ日(7月下旬)、当館を会場に戦後70年企画「長野県民の1945—疎開・動員体験と上原良司^{うえはらりょうじ}—」が始まります。先の大戦、特に1945年がどのようなものであったかを、県民の視点から展示します。

10月初めには秋季企画展「樹木と人の交渉史」が始まります。高速道、新幹線建設に伴う発掘調査で出土した多様な木製品の保存処理を長い時間をかけて当館で実施してきましたが、その成果をわかりやすく展示します。

12月下旬には、当館所蔵の明治初期の町村絵図について、長野県測量業設計協会と共同研究してきた成果を展示します。

このほか、歴史館で実施する各種講座について、県内各地に出前講座を実施する予定です。今年も、より多くの県民のみなさんにとって、歴史館が身近な存在になるよう努めてまいります。

楽しく
学ぶ!

縄文風クリスマスリース、 ゾートロープ作り

縄文土器展から

当館では、昨年(2019年)の11月29日(土)から2月1日(日)まで「縄文土器展—デコボコかざりのはじまり—」を開催しています。

長野県内では、20～40年前に行われた大規模開発や圃場整備事業に伴う発掘調査で、縄文土器などの考古資料が大量に見つかっています。ところが、その後、身近な地区での発掘調査は減少し、発掘された資料の多くも収蔵庫で眠ったままのものが多くなっています。そのため、今の子どもたちや若い親御さん世代には、遺跡や遺物などの考古資料が縁遠い存在になっているようです。

「デコボコかざり」という副題も、こうした世代の方々に縄文土器の素晴らしさに関心を持って欲しい、との想いからつけました。そして、関連行事も、子どもたちが気軽に楽しめるメニューを考えました。

クリスマス目の12月20日(土)には、縄文風クリスマスリースと、踊る縄文人が回るゾートロー

プ(回転のぞき絵)を作るイベントを行いました。前日までの雪が残り、道路事情が悪かったにもかかわらず、17名の参加者がありました。

リースは、縄文土器展のテーマの一つである深い鍋(深鉢形土器)と、食材としてのクリやドングリ^{くるり}の関係を表現しました。また遠隔地との交流を象徴するものとして海の貝を素材に加えました。

縄文人も利用していたツヅラフジの蔓を台座にし、歴史館の庭で採れたコナラ・クヌギ・クリ・トチ・オニグルミ、千葉県の海岸などで採取したサルボウ・ハイガイ・イボキサゴ・タカラガイなどで飾りました。

ミュージアムショップでおもちゃの土偶や黒曜石を購入して、飾りに加えた家族も複数あり、オリジナルリースの完成に満足していただけたようです。

このリースを見るたび、縄文時代に想いをはせてくれば嬉しく思っています。みなさんも、お気軽に歴史館に遊びにきてください。



完成したオリジナルの縄文風クリスマスリースと紙製ゾートロープをお披露目

山と海の廻廊をゆく

— 信濃と北陸をつなぐ道 —

信濃国、長野県は本州中部にあって、県歌に「十州に境連ぬる」とうたわれるように東西南北のさまざまな諸地域との交流の中でその歴史が形成されてきました。地域と地域を結ぶのは道であり、山岳地帯に立地する当地の場合は、その道の多くは険しい峠を越えていくものでした。文字が使われるようになる遙か前より、道をたどって人びとは移動し、物が運ばれ、技術、思想、文化などが伝わっていきました。

その中で北につながる道は、原始から現代まで日本海沿岸と内陸を結ぶ重要な道として存在してきました。この道は北と南をつなぐだけではなく、さらにその先のさまざまな地域へとつながる経路の一部でした。いいかえれば、信濃と北陸とをむすぶ道は、信濃、さらには日本列島をとりまく廻廊の一部ということができます。

今回の企画展では、このような視点から、これまで連綿と紡がれてきた信濃と北陸各地域との歴史的な結びつきに関わる資料を5つのテーマを設けて展示します（主な展示品のうち※は展示替えにより陳列期間が限定されます）。

テーマ1 シナノの文化 コシの文化

日本海沿岸の人びとと中部山岳地域の人びとの交流は遙か昔にさかのぼります。山幸・シナノの文化、海幸・コシ（現在の北陸地域）の文化はお



長野女子高校校庭遺跡出土台付裝飾壺
（長野市埋蔵文化財センター）

互いに影響を与えあっていました。

魚骨製耳飾（長野市埋蔵文化財センター）／※魚形線刻画土器（飯山市教育委員会）／長野女子高校校庭遺跡から出土した北陸系土器（長野市埋蔵文化財センター）／北陸の遺跡から出土した栗林式系土器（福井県教育委員会ほか）

テーマ2 信濃国と北陸道諸国

古代の律令国家は、都と諸国をむすぶ道を整えました。信濃国には東山道が通り、北陸諸国は北陸道で結ばれていました。信濃国から越後国へは東山道と北陸道をつなぐ道がのびていました。



石川県加茂遺跡出土加賀郡勝示札 複製（国立歴史民俗博物館）



木曾義仲合戦図屏風 右隻（千葉市美術館）

新潟県八幡林遺跡出土品（長岡市教育委員会）／富山県水橋荒町・辻ヶ堂遺跡出土品（富山県教育委員会埋蔵文化財センター）／同県赤井南遺跡出土品（富山県埋蔵文化財センター）／同県桜町遺跡出土品（小矢部市教育委員会）／石川県加茂遺跡出土加賀郡勝示札（複製、国立歴史民俗博物館）

テーマ3 旭将軍義仲

中世の信濃を代表する人物、木曾（源）義仲は信濃・上野の武士を率いて日本海沿岸の平家勢力を打ち破り、北陸の武士を加え一氣に上洛をはたしました。義仲の軌跡を屏風や文書などでたどります。

※木曾義仲合戦図屏風（千葉市美術館、国立歴史民俗博物館、当館）／木曾義仲下文（複製、当館）／雑録追加巻七（石川県立図書館）

テーマ4 街道をゆぎかう

江戸時代の信濃と北陸を結ぶ主要な道は、北国街道（北国脇往還）でした。この道は参勤交代の道であり、また善光寺参りなど信仰の道でもありました。

※下街道参勤交代図巻（石川県立歴史博物館）／※大名行列絵巻（金沢市立玉川図書館近世史料館）

テーマ5 北信越の近代化とむすびつき

明治天皇の巡幸は、北信越地域の新時代のはじまりを告げるものでした。その後、明治政府はいち早く信越線を建設し、日本海沿岸と東京間の交通の近代化をはかりました。

※北陸道御巡幸図（当館）／長野学校生徒洋服（当館）／※直江津上野間鉄道雙六各駅真景（国文学研究資料館）

／長野県行政文書（当館）／長野市西町中沢家文書（個人 長野市立博物館寄託）

本年は北陸新幹線が長野から金沢まで延伸開業になり、新たな交通網が整備されます。また、数えで「七年に一度」行われる善光寺前立本尊御開帳の年にあたります。長野県と北陸各県をはじめ、さまざまな地域との交流がますます盛んになるものと予想されます。ぜひご来館いただき、地域間交流についてご理解を深めていただければ幸いです。



信越線開業100周年記念入場券（当館）

緑釉陶器って、何？

平安時代に生産された陶器に、灰釉陶器かいゆうとう き りよくゆうと緑釉陶器りよくゆうがあります。

灰釉陶器は、植物の灰を水に溶いてかけて、それを溶かすため1200度以上の高温で焼きます。高温に耐える粘土が必要で、産地は良質な粘土が得られる愛知県、岐阜県、静岡県に限られます。

緑釉陶器の釉薬ゆうやくは、つやつやした光沢をだす鉛、緑に発色させる銅の二種類が混ぜられます。鉛や銅は800度程度の比較的低温で溶けるため、高温ではかえって釉薬が溶けて無くなります。そのため、釉薬をかけない「素地」を焼き、次に比較的簡単な施設で、釉薬を溶着させるための二度焼きをします。

緑釉陶器のルーツは奈良時代に中国から輸入された「唐三彩」を真似た、「奈良三彩」です。三彩の白い部分は鉛の釉薬だけで生地とうさんさいの白さをそのまま、濃い緑部分は鉛に比較的多くの銅、黄色い部分は少量の銅を、というように鉛に混ぜる銅の量を調整して三色を発色させます。

平安時代に唐三彩に代わって越州窯青磁えっしゅうようが輸入されるようになり、それを真似て緑の単色にして、9世紀前半から150年ほど生産されたのが緑釉陶器です。奈良三彩が仏具などの豪華な品が多いのに対し、緑釉陶器の製品は青磁と同じように碗・皿などの食器が多いのも特徴です。このような陶器を使用できる人々は、当然身分の高い人たちに限られます。生産は9世紀前半に平安京周辺で始まり、高温に耐える粘土が必要ないため、灰釉陶器が生産された地域他に、京都府、滋賀県、山口県でも生産されました。

長野県内で奈良三彩の出土した遺跡は10に達しませんが、緑釉陶器は少量ですが数多くの遺跡から発見されています。しかし、よく観察すると9世紀中頃までは京都府産や愛知県産（猿投窯

産）の優品が、数少ない拠点的な遺跡から出土します。ところが10世紀になると、ほとんどの集落遺跡から出土するようになります。これは、使う人々の増加と、それに伴う生産地の拡散、生産量の増大が背景にあります。製品も9世紀代が発色が薄く黄色の優品が多く、線彫りで飾る製品があるのに対し、10世紀代は越州窯青磁の流行に合わせて濃緑色に変化するとともに、二回目の焼成温度が高すぎて釉薬の溶着が悪いものまで流通するようになります。

11世紀代に中国から多量の白磁が持ち込まれると、緑釉陶器の優位性は失われ生産も終了します。



長野市榎田遺跡出土緑釉陶器花文碗（当館）

記録を残し、いかす文化

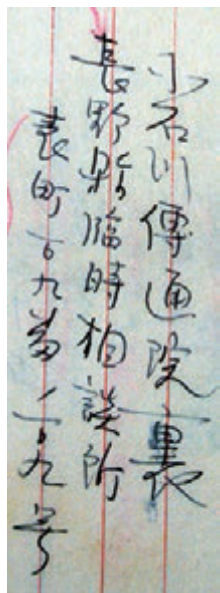


避難人名簿（当館）

左側の写真は、大正12年（1923）に起きた関東大震災の際に、当時の信越線軽井沢駅で用意され、避難者に記入させたものです。ここには避難者の名前、住所とともに「行先地名」が書かれており、信越・北陸方面のみならず、名古屋や近畿、中国地方など西日本方面を行先地とする避難者が多くみられます。これは震災で東海道線、中央線（東京国分寺間、浅川・葦崎間等）が不通となり、関東地方と関西地方の連絡は主として信越線のみとなったためでした。

こうした状況により震災から2週間ほどは、信越線で地方に逃れようとする避難者が沿線各駅に殺到しました。特に右の写真が示すように信越線と篠ノ井線の乗換駅である篠ノ井駅には57,448人もの避難者が来ました。また、西日本方面や東京方面へ行く人々がこの駅で乗り換えたため、上りと下りの旅客がかち合い大混雑し、篠ノ井駅周辺は一時騒然とした状態となりました。そうした中、篠ノ井駅では、県や郡、町役場が救護所を設置して、職員とともに青年団、婦人会などの各種団体や地域住民が総出で焚出等、献身的な救護活動を行いました。

上の右側の写真は行政文書で、罹災した在京長野県出身者を対象にした「長野県臨時相談所」を



長野県臨時相談所関係書類（当館）

東京の小石川に設置したことが記録されています。その内容からは、職業や住宅問題、経済的な悩みなどあらゆる相談を求める長野県出身者の心のより所となっている様子が伺えます。また、この臨時相談所が短期間で有効な活動ができたのは場所の選定など「長野県人会」の協力がとても大きかったことが読み取れます。このことは首都直下型地震が想定されている現在においてもいかなる点が示唆されています。

当館には関東大震災にかかわる一連の行政文書が約30冊あります。そこには前述した記録以外に、徴発物資や義捐金関係、救護班派遣、震災避難民調査などの内容項目が記載されています。

災害の「記録を残し、検証し、いかす文化」の大切さを考えるとき、こうした行政文書がますます貴重なものであることに気づかされます。



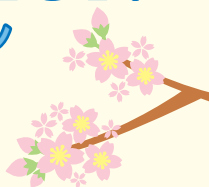
避難者が押し寄せる篠ノ井駅前（長野市公文書館）

「それぞれの戦いし意味つきつめず 来し戦後なり今に問わるる」とは昭和49年に新聞の短歌欄に寄せられた歌です。この歌が戦後70年経った今も心に響いてくるのは、戦時中を検証する資料が極めて乏しいためとも言えます。記録が残らなければ時代を検証する術がありません。そんな中、わずかに残った資料や手記がその時代の一面を語りかけてくれます。当館では、7月から「長野県民の1945—疎開・動員体験と上原良司—」と題した展示を企画しています。みなさんも「戦後70年目の夏」に是非お越し下さい。

INFORMATION

インフォメーション

■2015年(平成27) 2月～6月の行事予定



2月

休館日
2・3
9・12
16・
23～25

講座・イベント

やさしい信濃の歴史講座(全6回) 13:30～15:10

■第5回 2/7(土)

宮本 博 街道屈指の難所 横吹坂を越え坂木宿へ
遠藤公洋 「飯縄」「戸隠」を訪れた人々と、描かれた道場

■第6回 2/14(土)

傳田伊史 北陸と善光寺をむすぶ道～北国街道の往来～
織田顕行 氏(飯田市美術博物館学芸員)
聖徳太子信仰のひろがりと善光寺

「地域と共働した」連携講座② 2/21(土) 13:30～16:00

「信濃史料のデジタル化と長野県の歴史研究」

講師：当館総合情報課長 福島正樹

「原本史料の読み直しと信濃史料」

講師：東京大学史料編纂所教授 田島 公氏

春季企画展

3月

休館日
2・9
16・23
30

山と海の廻廊をゆく
～信濃と北陸をつなぐ道～

2/28(土)～5/17(日)

■講演会

4/18(土) 13:30～
「信濃と北陸を旅した人びと」
講師：富山大学人文学部教授
鈴木景二氏

■展示解説

毎週土曜日
および4/29、5/3～5/5

時間等詳細は
ホームページやちらしを
ご覧ください

歴史館セミナー②

3/7(土)

テーマ「再発見！わたしたち
のふるさと。足もとから見直
す歴史と文化」

当館職員：傳田伊史
長野市真田宝物館学芸員係長
降幡浩樹氏

親子映画会 13:30～15:00

3/21(土)・22(日)・24(火)・25(水)

4月

休館日
20・27
30

5月

休館日
7・11
18・25

速報展

長野県の
遺跡発掘2015

5/30(土)～7/12(日)

■講演会

5/30(土) 13:30～
講師：明治大学名誉教授
大塚初重氏

■遺跡報告会

6/6(土) 13:30～

歴史館でこどもの日

5/4(月)・5(火)

古文書講座

初級A・B 6/7(日)・18(木)
中級A・B 6/6(土)・18(木)
上級 5/23(土)・6/27(土)

考古学講座① 6/20(土)

歴史館セミナー 6/27(土)

6月

休館日
1・8
15・22
29

表紙の写真

《北陸道御巡幸図》 当館蔵

ようしゅうちかのぶ

楊洲周延(1838～1912)の作。明治天皇は明治5年(1872)から同18年(1885)にかけて6度の巡幸を行うが、この作品は第3回をえがく。同11年(1878)8月30日に右大臣岩倉具視をはじめ総勢約700名で東京を出立、長野県を経て北陸・東海道を進み、11月9日に帰京した。

行事アルバム



秋季企画展「信濃武士の決断」 9/27～11/9

川中島の戦い後における信濃争乱時代の情勢と、信濃武士の生き抜くための決断を展示しました。10月25日には井原今朝男氏による講演会「織豊時代の終焉と天下統一」が行われ、展示解説にも多くの参加者がありました(写真上)。10月26日には屋代城に登るイベントを行いました(写真下)。



「森將軍塚まつり」で勾玉づくり 11/3

「文化の日」、科野の里を会場に行いました。ボランティア会員や職員といっしょに、縄文人になった気分で作成した素朴な勾玉を作り上げました。

長野県立歴史館たより 春号 vol.82

2015年(平成27) 1月28日発行

編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市屋代260-6
電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996
E-mail rekishikan@pref.nagano.lg.jp
ホームページ http://www.npmh.net/

印刷 奥山印刷工業(株)